



Vol. 104

## CONTENTS

【コラム】携わるシステムが利用される楽しみ… 松浦 健二

【解説】ワークショップで小学生のための情報科学の授業を作った話… 原田 康徳

【解説】Processing でプログラミングに挑戦!—第 4 回アニメーションとインタラクション—… 杉浦 学

## COLUMN

### 携わるシステムが利用される楽しみ



実世界の社会インフラとして、橋を架けたとか、道を通したなど、それぞれの仕事を成し遂げた方々は、それらの利用状況を見て、自らが成したモノに対して、陰に陽に誇りに思うことがあると想像します。情報学関係の分野では、たとえば研究者なら提案手法やアルゴリズムといった研究成果が、ほかの研究の糧や礎になることもあれば、教育者ならば自らが教育文脈で関係した人の成長を見ることも類すると思います。

情報基盤や情報システムの場合を想像してみます。そうすると、たとえば内製の場合では、システム導入当初、利用者から聞こえてくる声の中には、“今までと違う（戸惑い）”、“使いにくい（批判）”といったネガティブなものもあります。そんなときには、提供側は、それらに対して“システムや基盤は常に進化・改善されます”とか“手順書は読みましたか？”、のような心の声を発することもあるかと思います。状況を否定的に捉えず、“ああ、使ってもらえている”とか“なるほど、〇〇にはまだ改善の余地がある”などと肯定的な姿勢であれば、精神面でも健全です。外注システムの場合でも、要件定義や外部仕様への関与、あるいは運用への寄与など携わり方はさまざまですが、直接的でなくとも、ある種の冷静で真剣な思いがより良いシステムに繋がることはよくあります。

否定的な声は的を射ていることも多いので、ありがたくひとつひとつの声を冷静に分析しながら、システム改善に繋げていけば、次のシステムではその経験が活かされます。使われる楽しみを覚えるのは、どの程度工夫し、どの程度魂を込めた（ベストを尽くした）か次第な部分があります。技術的に工夫した部分が「はまる」と喜びは倍増です。工夫の中には、簡単なスクリプトの提供だけでも現場からは大変重宝されることもあります。ただし、ライフサイクル上の契機により終息するシステムもあり、終息が決まったときにはスパッと気持ちを切り替えられる素養も大切で、それには経験が必要です。

実世界の道や橋にも大小あって、その利用者も地域の方だったり世界中の方だったりするわけですが、情報システムでも同様です。情報システムの文脈で何等かの対岸に橋を架け、道を通すことでさまざまな方に貢献できれば、この世界で生きていくひとつの動機（楽しみ）になり得ます。もしこれからシステム提供側を目指すなら、さまざまな声を冷静に捉えて「めげずに楽しむ」ための経験と自信を持ちたいものです。

松浦健二(徳島大学)